

## 新刊

□清水晶子 (著)・大場秀章 (監): 絵でわかる植物の世界 168 pp. 2004. ¥2,000. 講談社. ISBN: 4-06-154754-2.

自然観察の際最も目に触れる機会の多い顕花植物について、分類学的・形態学的な事柄を教えようとするとき、どうもうまい教科書がない。「植物学」の教科書では系統学的観点から顕花植物はほんの片隅に押しやられ、おまけに生命に共通な物質生物学的な話題ばかりが強調されている。高校出の学生はいかに自然が好きであっても、花や葉を手にとって観察する授業を受けていないから、どこに目をつければ観察できるのか知らない。植物観察は名前がわかれば終わり、という認識である。本書は、そういう人達がそこらの野外で出会う植物をどう見るかについて、参考にしてもらうのに適当だと思う。

1. 植物のかたち, 2. 植物の生活, 3. 植物の生殖, 4. 植物の分類の4章より成り、です。まず調の文章と85の模式的な絵と16枚の図鑑的植物画が挿入されている。一見したところ文より絵の方が多くいかに感じる。写真は一枚もないが、これはこれで一つの行き方と思う。というのは、写真は細大もらさず写っている反面、予備知識がない者が見ると、どこが見るべき対象か気がつかないことがあるのだ。絵だと見せたいところを強調したりデフォルムしたりすることができる。

形態的なことが主題となっているが、2章では光合成や運動の仕組みが説明されると共に、他のところでも形態や構造と生理生化学的な仕組みとの関連が述べられている。4章ではいくつかの大きな科をとりあげて、特徴をわかりやすく解説する一方、最近のDNA研究による分類体系の見直しについても一言されている。一般向きの他書にはあまり見かけない「タイプ標本とハーバリウム」という見出しもある。記述はすべてアッサリしたもので、教科書的な精細さには欠けるけれど、自然観察に興味を持ちはじめた人達の目を肥えさせるための参考書として有用と思う。

巻末の事項索引を見ていて、もっと説明してほしいいくつかのことがらに気づいた。たとえば散布体と散布の仕組み、花粉の形と送

粉、つると巻きひげと付着根とつる植物、八重咲き、裸芽と鱗芽などである。植物が好きだという学生でも、花粉は花粉症のもとになる粉としか認識していない人が少なくない。カキの種子は写生図がほしい。カキの果実の中に種子があることを知らない者がいるほどだから(果物屋で買うので)、その種子の中がどうなっているかを知っている人はほとんどいないのである。(金井弘夫)

□小松かつ子, Batkhoo J., Sanchir Ch. (編): モンゴル国有用植物図鑑 247 pp. 2003. モンゴル国有用植物図鑑ワーキンググループ(モンゴル国自然環境省, 日本国国際協力事業団). ウランバートル. ISBN: 99929-0-146-2.

本書は、上記のワーキンググループの共同プロジェクトとして刊行された植物図鑑である。同書の「はじめに」によると、モンゴルには3000種近く的高等植物が生育し、そのうちの1000種以上が有用植物とのことである。本書ではそのうちの277種を選び、学名、和名、モンゴル名(モンゴル文字及びアルファベット表記)、チベット名(アルファベット表記)を挙げ、カラー写真を掲載して、形態、花期、分布、「植生」(生育地を指している)、薬効などが日本語で解説されている。執筆者としては小松かつ子氏, J. Batkhoo 氏, B. Boldsaikhan 氏, 伏見裕利氏らの名前が並び、協力者としてモンゴルと日本の数多くの研究者の名前が挙げられている。

カラー写真は植物体の全形を示す生態写真と花部のアップ写真が掲載されている。これが、紙質が良好なことで相俟って、素晴らしい出来映えである。中には不鮮明なものもあることはあるが、短期間で仕上げなくてはならなかったとのことで、花にはシーズンがあるため、やむを得ないものと思われる。評者のように本書を *Florsitic manual* ととらえる立場からは、記載文に加えて鮮明な写真が貼付されている本書はモンゴルのフロラの理解に役に立つと思う。

入手方法について国際協力事業団(JICA)に問い合わせてみたが、残念ながら、現在の

ところ絶版ということである。ただ、日本国内で要望する声が高まれば、モンゴルで再版される可能性が高いということであった。モンゴルへの連絡先は次のとおり。Laboratory of Pharmacognosy, Faculty of Biology, National University of Mongolia, Post Office Box-377, Ulaanbaatar-46, Mongolia. Tel & Fax: +976-11-321246. E-mail: bathuu@mobinet.mn.

(門田裕一)

□ケルサン・ノルブ (Norbu K.): **Tibetan Medicinal Plants** 399 pp. 2004. 40元. 西藏人民出版社. ISBN: 7-223-01668-X/R・61.

チベットにおける薬用植物利用の現状を知ろうとして、2004年5月にラサで購入した。本文はチベット語で書かれている。中国語のタイトルは藏医動植物药材標本。カラー写真と原色図を用いた、藏葯の教科書である。著者のノルブ氏は1972年の生まれで、チベット医学の現場で経験を積んでこられた方という。写真と図のクオリティはまちまちではあるが、印刷・紙質ともに出来映えは素晴らしい。評者はチベット語を全く理解できないので、写真と図、学名、中国名のみで判断していることをお断りしておきたい。

印刷はなかなか良いのであるが、あまりにも誤植が多い、というのが第一印象である。単なるミススペルのレベルではなく、例えば、カラー写真がキク科トウヒレン属の「*Saussurea medusa*」なのに、中国名が「条葉銀蓮花」、学名がキンポウゲ科イチリンソウ属の「*Anemone trullifolia*」となっている。単なる校正ミスともいえるが、このような誤りがかなり目立つ。本書の教科書としての性格上、これはかなり問題が大きいと言わざるを得ない。

しかし、チベットにどのような植物があるのか、写真で理解しようとするときには有用な本といえよう。なお、藏葯の教科書であるため、貝殻、ウナギ、ドジョウなど植物以外のものも掲載されている。(門田裕一)

□清水晶子: **ロンドンの小さな博物館** 254 pp. 2003. ¥720. 集英社新書. ISBN: 4-08-720195-3.

別に紹介した「絵でわかる植物の世界」の著者とは同名異人である。ロンドンには大英博物館など大型なもの他に、200あまりの中小博物館があるそうで、その中からグリニッジ天文台、フリーメイソン博物館、インク博物館、シャーロックホームズ博物館など16施設が紹介されている。植物関係としては庭園史博物館、トワイニング紅茶博物館が出ている。前者は17世紀の採集家 Tradescant 父子にちなむもので、設立の由来が面白い。1976年になって、忘れ去られていた彼らの墓が発見され、それをきっかけに篤志家によってイングリッシュガーデンの元祖ともいべき父子を記念するこの博物館が出来たのだそうだ、つぶれた会社の散逸した作品を収集家がい集め、トラストを作って運営しているところがあるかと思うと、原稿を書いているうちに潰れてしまった博物館もあるという。紅茶博物館は、もちろん今も続く会社の本店にある、たった二室の展示である。単なる観光案内ではなく、著者のイギリス文化史の素養に裏付けられた、随筆風の読みでのある文章である。日本でもこういう案内書があると、教育目的の一点張りの博物館のイメージが変わるだろうに。

(金井弘夫)